

表紙解説

『携帯用秤』^{はかり}

江戸時代の商家ではさまざまな秤が使われていましたが、その中でもっとも小さなタイプの秤です。

使い方は、まず竿の片側に皿を吊るし、皿の上に重さを量りたい物を乗せ、もう片側に分銅を吊るします。それから、支点となる紐で支えて、分銅を左右に動かして釣り合った時の目盛りを見れば、物の重さが分かるのです。

この秤で量ったのは、葉や小さな銀貨などの軽い物でした。貨幣には計数貨幣（形や量目が定まっていて、枚数を数えて使う貨幣）と秤量貨幣（形や量目が不定で、重さを量って使う貨幣）とがあり、江戸時代に流通していた金貨と銭貨、それと銀貨でも一分銀などは前者でしたが、丁銀や豆板銀は後者でした。

こうした秤は「彦根秤」とも呼ばれますが、瓢箪型の箱に入っているため「瓢箪秤」、厘の単位まで量れるので「厘秤」などといった呼び方もあります。



青柳 周一（経済学部附属史料館准教授）



『チャールススミス氏中等算術』（明治26年）

チャールス・スミスは、イギリスの数学者、数学教育学者であり、原著は1891年に刊行されています。この教科書は佐久間文太郎が翻訳・編纂して、原著者の名を冠した教科書として1893（明治26）年に京都・津逮堂より発行されました。序文には「本著ハ算術ノ基礎ヲ正確ニ其原則及ヒ運算ヲシテ明白且ツ完全ニ説明スルヲ以テ主眼トナシ」と書かれています。

上巻第一編「読数法及記数法」は、「1 数（Number）之思想ハ同シ種類ノ聚マリヨリ起レルモノナリ」「算術（Arithmetic）ハ数ニ就テ論スル所ノ学問ニシテ其数ニ属スル種類ヲ考究スルモノナリ」と説明した上で、例題を提示しています。数学的概念規定を正確につかませ、具体的な問題練習をさせていくスタイルです。第二編「加法減法乗法除法及其例題」第三編「複数量及其例題」へと進みます。

他にも『チャールススミス氏代数学』（明治21年）、『中等代数学教科書』（同年）、『スミス氏小代数学』（明治24年）、『チャーるすすみ氏中等数学』（明治25年）が刊行されており、算術・数学教育の日本の黎明期に大きな影響を与えました。

木全 清博（教育学部教授）

広報誌『しがだい』 第32号 読者アンケートご協力のお願い

広報誌『しがだい』をご愛読いただきまして、誠にありがとうございます。

読者の皆様の声をより誌面に生かすため、率直なご意見ご感想をお聞かせ下さい。

なお、「読者アンケート」にご記入頂いたお客様の個人情報は、今後の広報誌編集の参考にさせていただくためにのみ使用し、他の目的には一切使用致しません。

ご回答はホームページからお願いします。 滋賀大学公式HP[<http://www.shiga-u.ac.jp/>]から「大学紹介」→「広報誌しがだい」